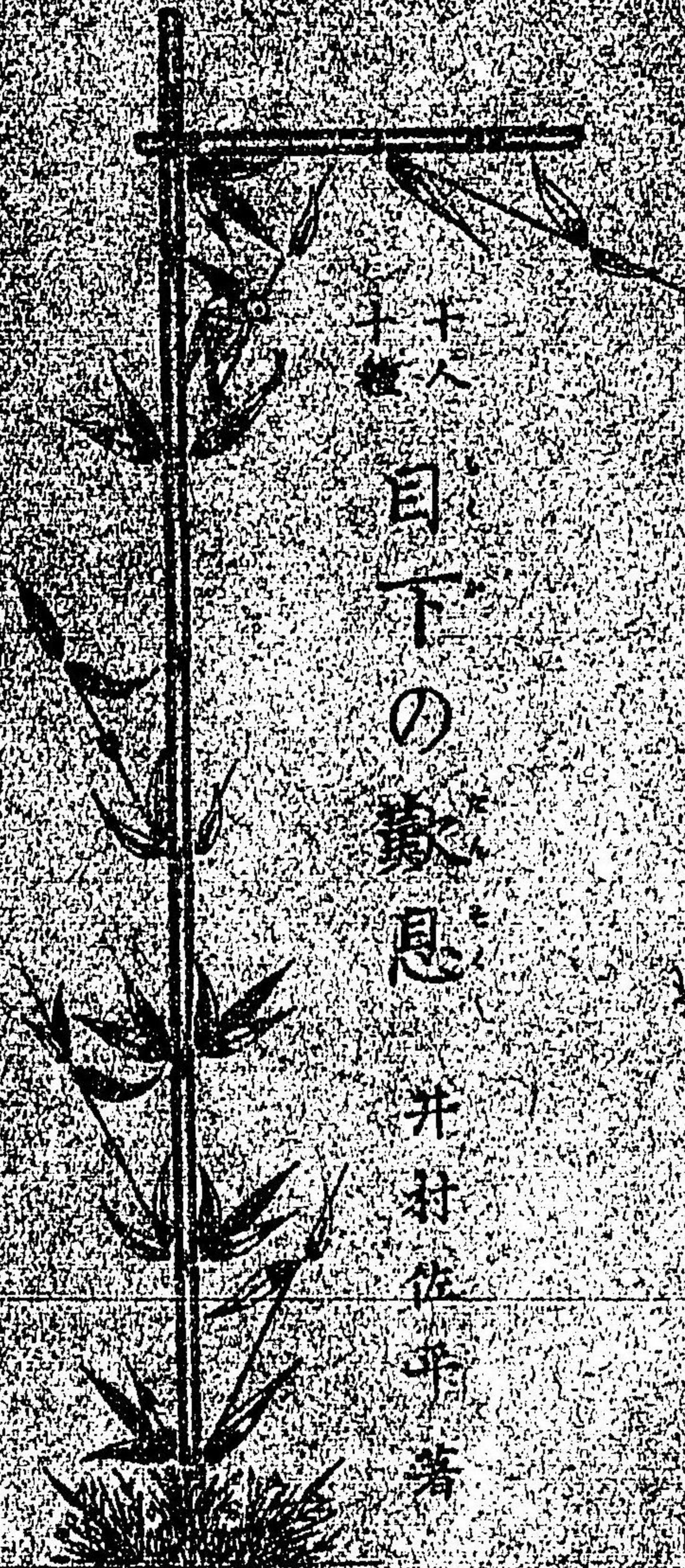


22  
13  
44



十人十種目下の歎息  
井村佐平著

（印刷所製刷紙活字組立）

004803-000-1

特17-149

十人十種目下の歎息

井村 佐平/著

M23

ACE-1500



No 5780 / 23



十八十種目下の歎息

井村佐

第一 貴族院議員當撰者の歎息



跡おしで……、チヨット五十圓たらず、しめて五百五拾圓ウ、ナニニまだあるく、當  
 撰の折又細君の御無心、帶一筋に單物一枚、これが例年より餘計の散財惜しく、わ  
 つたが嬉しすぎれ貧民救助に施し米の貳拾石、是を相場よつもれ、何拾何圓彼、是  
 やでぎッと千圓の入費、サテこれまでのソとしてこれから後がドウアロウ、高帽  
 も買はずなるまひ、フロクコートも必用たろう、風呂敷つゝみで荷物も送れずシ  
 ヤボン、イヤズボン、でもなひソウくカバン……其カバンも求めねばならず、  
 ホイそれも田舎ではトテモあるまひサテ彌上京して而後が大變々々御連中は何  
 れも有爵の華族方黒塗の馬車は馬車々々しい散財ながらなくてはなるまひ、ツレよ

第一 貴族院議員當撰者の歎息

第一 貴族院議員當撰者の歎息

二

御者、作男の太良作でまに合ふりしらん、イヤ、何れ東京で雇はずばなるまひ、  
ホイ是れもも着物がいる、マ、ヨ兵隊の古着をさせてやれ所で旅館のドウシヨーツ  
イ、まさか下宿住ひもなるまひ、家を買ふ造作をする書生を置く下婢を置く、ソレ  
に妻君も束髪出たちの洋服着用か、ソレデなければ日本服、コート帯又何十圓、着  
物に何十圓、まだ此外にあれやこれや八百圓で足るうしらんイヤとても足るまひ、  
夫れも内村の事ならよけれと東京へ出ての話融通もさかす知友もなし左りとて外の  
議員達ちへチヨイト二三百圓四五日拜借もさまりが悪るひは、マ、ヨ地所の二三町  
歩も賣てしまへ、マテ暫時財政はソートしてサテ議論其議論が出来るか知らんソレ  
モ新聞屋の受賣をするとしても第一辨舌が悪るひをかりウナマリ澤山外の議員には  
かるまひと、二三日跡も學校で噂があつたと小供は正直、悴の物談、サテ困つたホ  
ソニ驚た、コレを思へば國會さきにたゝすどの、ヨ一云ふた事、逢ひ見ての後の  
心よくらふれば、如何にも左用、昔は物を思はざりけれ

第二 撰擧者の歎息

雞の聲色聞くやうよ、國會々々ど、鳴き明うしたも十年越し、彌々お待かねの二十  
三年今日今日、議員の撰擧も濟しと曉となつて見ると、あんまり待つた甲斐もない  
もの、抑も、代議士たる者は、吾人々民多數の意思を、代表する人物にしあれば……  
立憲政治の功能、功德を顯はす基礎よしあれば、淺草の仁王を、顯微鏡で見るとに  
注意して、議員をさめねばならぬどの、豫々新紙でもうけたまわり、隣家の教員に  
も話を聞いて、ソナそのよの量見でいたは日頃の事、肝心かなめな撰擧の折は、神  
田の祭禮見るようよ、何が何やらガヤ々々ザハ々々、持つて生れた浮氣性、ロハと  
聞いての飲まねばあらず、飲めば何時でも、振うす腰、腰抜なんどと云ひりやがま、  
よ、賄賂もやツぱり悪くはないもの、もろうてをこるは野暮の極、重ひ輕ひは何に  
もある、重さで定むる山吹色、花の咲ふが咲くまいが、質の一ツだに、なくては叶はず、  
其候補者は鳥でも、鷲坂流は我にありだど、あとささかまらず某氏へ投票、僕は義理

第二 撰擧者の歎息

三

第三 壯士の歎息

四

づく撰びでみても、ナニがさてあんな人物、外は投票のしてゐるまいと、思ふ見當の大違ひ、マンマと首尾よく某氏が當撰、して見りや外にもそれ然り、僕の仲間がわつたど見へる、それはよけれど、くごさらあひかな、飲んだ當時はよかつたか残る所は頭痛と溜飲、もらつた卵はすつかり腐敗、新聞で彼是噂をされると、當撰の翌日送つた祝意の菓子折(それも三十日は拂はねばならぬと細君の小言)とが、つまる所のこれ損失、二二天作算盤にはかゝらぬ、嗚呼馬鹿らしい、

第三 壯士の歎息

衣は肝に至り、袖腕に至る、腰間の櫛の棒、犬殺すべし、人觸るれば人をたゝき、馬ふるれば馬を打つ、頭よの西洋辻地蔵が冠りそらな麥藁帽を、阿彌陀流に戴き、足よの粗板然たる高下駄を、晴天の雷馬と、踏鳴し、反對黨を視る豺狼の如く、官吏は對する蛇蝎に均しく、一たび反對辨士の演説は妨害を與へて、此社會の判任となり、二度び警官の爲めに拘引と相成つて、此社會の奏任と昇進し、三度び獄ある三年、始

めて此社會の刺任となる、如此連中撰擧の折柄の、雨後の筈然とメツキリ増加し、あそこの演場、この會席に、立派に申せば花々敷、正直に陳れば騒々敷、取持知旗持知、提燈持、何かと持つた甲斐もなく、頼に思ふた候補殿……主人公……御本尊は、あわれ目出度當撰はまします、ボンヤリ然と下宿屋の二階で歎息の聲「馬鹿な話ではないか、あんなに骨を折つてさ……浅草の時なんぞは、拘引矢の如しとばかり、即座の引致、警察署の流連は、あんまり氣の利くものではない、それはまぶしも芝のそれ、あの時なんぞは九死を出て一生懸命のはたらき、それに何ぞや今日此頃あの某殿もなさない、如何に失敗すればとて、僕の下宿代位は、拂つてくれてもよさそうなもの、知らぬ顔どの胸愆な、其上、下宿屋も下宿屋なり、矢の催促に、腰を弓にしての申譯質庫は川となつて、流れ出す代物、借金は山となつて積もる書出し、人のいやがる相手にいせず、警官の目をつける食逃げもならず、牛飲馬食の時機は去り、窮乏貧乏の節來る、壯士もかくては早死と改名、驚たわひ、困まつたナ、勝手をたゝひて、

第三 壯士の歎息

五

第四 博覽會當込者の歎息

味ひ物の食ひあきをしたのも、ホイ今では夢う、夢々しひ話だ

第四 博覽會當込者の歎息

風鈴の中にブラリと食客、かねがなくてはならぬ世の中、何でも金なり、兎に角銭なり、これやこうしては居られぬと、二三年この方非常の憤發、藥九増倍質屋七増倍、八百屋が八百倍で萬屋は万倍、商ひが一番商賣に限るとばかり、創めてみると三度なく、めしさい剛のしやわらかし思ふまゝにはならぬが例ひ、一昨年材木山で大失敗、去年の生絲で圓るく損亡、あてごと、越中ふんとしひさきからはづれ、山仕事と登り坂の車の、後ろへ轉倒やすし、勘定あつて錢たらず、計算確如らしうして、實益特の外、手につかぬ者、思へばくこの己が去年の秋の失敗に、いづそやめてしまつたら、こうしたなげきはあつた者ど、トンダお園もどきの御愁歎、借りた時は地蔵のように思ふた債主も、今となつての閻魔然、閻魔の廳の帳消しがまだすまぬと日毎の債鬼に地獄の苦しみ火の車、貧乏ひまなしで時々目をまわす癖

第四 博覽會當込者の歎息

にまわらぬ者の借金でこれこの首、折しもよし東京の上野で内國勸業博覽會の開設ありと聞ひた時のひねの内「國會開設の當年と政事は騒げど何の曲もなひ事と、待ちもせなんだ二十三年……博覽會とは辱ひ、まづ國産の織物に漆器を出品して、三圓の反物に二十五錢の運賃諸雜費を加へて三圓廿五錢、こいつを五圓にたゝき賣れば差引勘定一圓七十五錢の儲け、これが千反で千七百五十圓、五六圓の漆器は十二三圓、七八十錢の者の一圓位に商ひをつけるとして、これにも千圓の利益のある、都合二千何百圓、端下の諸入費として、手取が二千圓、マ、ヨ五百圓の花柳社會にまさちらして、東京の不景氣を挽回してやれ……其上東京にも花主が出来る、賣捌人が顯われる……品質善良なり之れを嘉納すどばかり金牌頂戴で世の中には信用を得る、儲けた金の千五百圓これを資金に歸國の上は天晴立派な紳士で商賣ができるどの嬉しでなひか、ホイ勘定のよいが、第一資本がなひの、かまう事なひ、田地なりと賣らうか、待てよ其田地も隣家の所有で賣る譯に參らぬわひ、いつその事

第五 衆議院議員細君の歎息

家宅を抵當に金を借りよう、それもだめだ去年の夏から既に書入れになつて居る者  
と……よし／＼細君の親元、あれが此頃仕上げた金持、嗚々に頼むで手をすつて苦  
説て拜むで、ソーサ千圓ナニそーいだめとして五百圓か、これも六ヶ敷ひがそら  
どしよう」と獨で極めても度々の事、細君の親父……舅殿は中々客易承知せず、彼  
處から拾圓此處から二拾圓漸の事で取纏めた何百圓、それを資金よ上野へ開店、ま  
んまど始尾よく當込ぶかと思ふと、んでもない事、大違ひ、それは／＼氣の毒な者、  
何がさて雜費は多し買手となし、客はあつても素見パツリ、たま／＼買へば小便  
をされる、こんな事ではどうしようぞ、此れさまりの何とせん、進まんう金がある、  
退らんか金がある、兼々こうと知らなんだと博覽會出品者の或部分が歎息の聲

第五 衆議院議員細君の歎息

今は昔、妻が二七の歳よす待る徳川の流れ。や、濁りろめにし頃、今の夫の其當時、  
某藩の武士、嫁入りし折は氣樂な暮し、それも王政復古とやら維新とやら異人とや

らなつて後は、祿も公債と變り果てし世の中、その公債も奉還して、なれぬ商法  
よなくなした資本金、昔は鎗一すじの主人と呼ばれた夫、今は貧棒の棒主と云わる  
、我つま、これでも困ると其後は非常の憤發、始めは郡役所の雇ひにこいり、追々  
立身出世して、よろ／＼の事郡長とまでなりあがり、これで安心あら嬉しやと思ふ  
まもなく辭職をしようとは、なんの事と役所のかどでに呉々もお諫め申た其時に思  
ひどまつて玉はらず、トウ／＼辭職をした上で、疑念とく議員とかよなると云ふて  
の。其騒ぎ、ヤレ宴會の費用だソレ周施人の世話料だど僅の貯は葉末の露か春の  
雪、消へて残るは衣類手道具、それも撰舉人への土産、壯士への贈物うねがあるか  
ら一枚ぬげ鯉節を買ふから一枚かせと筈みるようよ剝取られ、これも前世でコモカ  
ぶりをむごくせし報ひと、あきらめてみてもあきらめられず、ソリヤあんまりでこ  
ざんすど一本さめこめば平氣な顔、ナンノ、、着物の一枚や半枚吝む處でなし、  
なれが議員よさひなれば安いようだが年給の八百圓、ね前もそれ奥様どか令夫人と

第五 衆議院議員細君の歎息

第五 衆議院議員細君の歎息

か仰められ黒塗馬車とはいかなひまでも二人挽の人力で大威張、なんと嬉しいでないか、サツ喜ばしうろどれ事、妾もその氣で毎日毎夜、頼む神さま佛さま妙見さまへ願かけて待明した其お景、始尾よく當撰議員とやらになられたから、アテ難有や今日からの令夫人ホンニ奥様で御座ひますと、すましてをれると想ひさや、始尾よく御當撰これでおそ御周旋申た甲斐がある、ね目出どう御座ると周旋人が祝意の來館、如何も結構恐悦至極小生までが面目を施す次第目出たしくと友人が嘉儀の訪問、ソレ祝杯を用意せよソレ肴を調理せよと其度々主公の命令、煮るやら焼くやら水をくむやら、ソレハ、、とんだ混雜、いらひどい忙しさ、奥さまとばかり氣取る所か、濟ます處う何がされてね三どんも丁稚もたいならぬ大立廻り、愚痴もたころう、小言も出よう、何の事だ勝手もどでお百度をふまうとて不動さまへ百度詣はせぬ者を、他人も酒を飲まそうとて妙見様へ願酒はせぬ者を、それに酒屋の勘定、魚屋の拂ひ、朝から晩まであんな事では月末が大變、年八百圓で足るか知らん、妾

の着物もどうかせねばならぬ、ヤレ、困った事ではあるぞひ

第六 田舎老人の歎息

誰しも水は飲む癖に………特更君子は水を樂しむと云ふなるに、管我ばかり水飲百性、土を食って生きても居られぬぞ、人と呼ぶなる土百姓、百升どころか一升の米の時もなく、一生界を農家雪隠、尿やけよ日を暮らせば、蛆蟲同様に思ひれて、武士に向つて過言の至り、そこ動くな覺悟至せと、腰間の秋水一刀兩斷、色の黒い鬚附きの頭の瓜畑に落ちて瓜の蔓に茄子のなる奇觀、地頭の泣兒と比例をとって勝てない者よ、あばれる者と諦をつけ、武士の鯉節と反比例で本人まづ削られて細くなる、それも昔となり變つた今の世の中、四民同權官民一樣、土民は土瓶のこわれぬあらず、農夫の豆腐の出来損ひぬあらずと、人も云へば我も覺りにはかに手足の延びた心持、米納は金納と新玉の、春去り秋過ぐ幾何年、米價の騰貴に大福餅、甘ひ時節が到着したと、そろそろ始めた奢り沙汰、明治十二三年も通り過として、をいしく向ふ下り坂を

第六 田舎老人の歎息

第六 田舎老人の歎息

二人挽跡をしの有様と、又なり下るもとの南瓜、愚痴な小言と戸長は笑へど、日々へる税目課金、うんとこ税とツこい税、背負もきれない重荷の苦しさ、第一教育とやら明日行くとやら小供の教しえ方が氣よくはね、昔は寺の和尚さまへ盆と暮れどの遺物大根少々で事が足る、所を今の左様も参らずヤレ本だツレ石磐だ彼れのこれのど費用がうさび、それに人情は紙幣見たように薄くなり面皮の英和字彙のようも厚くなり、借りた者のもらった量見で催促すれば小言をささ、人の者の我物我物は矢張り我物、とばかり……ア、何時であつたかツレ、一昨年の春の頃であつた、材木山の境界争で隣村の五郎兵衛殿に裁判所へ呼出され始審で敗走した者の、これの儘もこツちの勝利、是非々々控訴へ持出し玉へと代言のす、めお承知をして名古屋へ往けば再度の敗訴、今度は愈々上京して始尾よく勝つたのよけれども、前後の費用の體した者、おまけに受取る金員の代言にチヨロマかされて一文も手よは入らず、後よよくく様子を聞けば原被の代言が相談の上であんな餘計な散財をさせ受取る

金まで横取りをしたと釋つた處で仕方もなし、馬鹿々々しひやら、くやしいやら、上京中よすられた時計と盗まれた羽織と車夫よねとされて高ナ輪でとられた七十五錢が附録どの情ない話……こんな工合も變化した今の人情、此人情も後れた我々、八十歳にはまだならぬぞ、天保親爺と馬鹿にされ殆ど當百仕る、親の心を子は知らず、兩三年此方鐵道とか瀛車とか云ふ者の世も出て、便利もなつたはこツちの大損、東京見物と名をつけて出掛けた悴は放蕩學を研究して、己れが汗を流してこしらへた金を涎を流して遣ひ捨、戻つた後の贅澤三昧、小言を云へば天保の人は話もならぬの、調子が違ふのと勝手な言草、讀本も知らぬ癖せにと小供までが馬鹿よする、何は兎も角暮らしにくひが一番困るボカン、、、、、(すひがらを落す音)

第七 坊主の歎息

昨日削つたも今道心、一昨日そつたも今道心、たい道心では食へない世の中、何か手内職をと申た處で、寺子屋のお師匠さまは昔の事、卒塔婆を博覽會へ出品とも参ら

第七 坊主の歎息



す、壇家はだんく減少し、墓カ数は墓々しく増えもせず、なまじなま中開化の風よ吹まわされて無常の風は空ふく風と知らぬ顔、此世の暮しが面倒になれば未來の事までは手が届かず、出家は失敬と同意に心得、五戒の誤解と音を通じ、百日の説法屁一ツ程の感情も興へられず、寺院を見ては西瓜畑と考へ、經文を聞いては狂文と聞流す、智力厚さを致して宗教心漸く薄らぎ、名譽心重さを加へて檀那寺輕んせらる、來世の極樂は今世の道樂に若かず、死後の地獄は現在の淫賣と似たりよつたり、墓へ線香を立てるなら藝者よ線香を立てるがまし、死人に花を手向けるなら半玉よ花を呉れるが上策、今の世界に、無用の長物と云ツば頑固親主のチョン髷と各宗の寺院社會の食つぶしと申さば浪人壯士と坊主殿と、斯用に説を立てる今日の風潮、腐敗の時機を見てどツてドン、ふり込むキリスト教、異教で五坐る邪教で候と頭をなしで昔は人も承知はしたが、左用に參らぬ開化の悲さ、イヤ邪教でも異教でも、一應取糺して見ぬ以上の、悪くは云われぬとばかり、日曜學校へ顔を出し、バイブルへ目を注ぐうら、何の耶蘇教々理と云ふても淺ひ物、功德もキツト薄ひなり、信ずる人物やわかあると、知りもしないひで勝手な見解、自家特許の考案を下しても、其教法と人心にや適しけん、第一宣教師の品行からが潔白清淨、今の坊主を見るような木魚と枕にドロンケン、お陀佛主義でなひのが感心と、雨後の筍メツキリ信者は増加する、其反比例でねいらの勘定も二二轉倒、二枕が一寢の高いびきもならぬに梵妻の愁嘆、小僧のなきごと、羅漢も抵當となつて苦界に沈むで、未來永劫浮む瀬のありをうもなし、彌陀の畫像も、難波の池にあらすして、質屋の庫よ流されてと、凡夫よ救ひ出される逆もどしの有様、鐘の音のポーんくを聞ては盆の拂ひが氣よか、り、線香のポーんくを懸ではポーんく償主のをこらん事が心配になる、狭ひ量見よ廣ひ伽藍、糞中よ餘有なうして書院に餘有あればと、去年の秋から院内の數室をナントか云ふたツけ、それく絲の蟲と云ツたような名前、あの開坑社に貸して、今年は座敷代で食料が足る、アラ嬉しやと思ふたはトンダ事、會社の破産よ家賃は這入らず、煙の表替

と唐紙の張替が損失とは、今更思へば開坑社でなうて後悔じやなんどは手ひとひ話、ア、なんどしさら佳かろう、門徒募集の廣告を新聞より出そうか貧民に限り無代會向すの引札を配ろうか、生命保険は浮世の業靈魂保險會社を設立するのどう云ふ者か、それともズット氣を替へて法友同志で西瓜踊りに、阿呆陀羅經で人氣をとろうか、肉食妻帯の難有世の功德なれど、錢がなくては野菜も食へず野妻も持てぬサツサ何としよう、どうしようぞひな南無阿彌陀佛チーン穴賢

第八 鯨公の歎息

長ひお髻よ、短ひお智恵、高ひ帽子に、低ひ鼻、鯨に瓢箪の附き物じやとて、ヌラリク  
ラリと飲暮し、これはど好きな酒じや物、ナマズに居られる物でなひ、鼻欠けならは  
五免なれど、權妻と來てはホントに目がなひ、飲むべし食ふべし抱くべし、諸や舞へ  
の散財騒、勝手氣儘に替澤三昧、朝は九時から御出頭、午後は三時に散じるまで、煙  
草 پاک、時計ジロ、今朝の新聞を讀むと、昨夜の痴話を談るが一日の事務、入

るよ高樓あり、出るに馬車あり、とまでは參らぬまでも、胸に赫く金時計は、月世界の  
燈臺の如く、頭に戴く高帽子は、文明界の壽老人の髻髻たり、地方を漫遊すれば、お役  
人様と許り、それさく低頭平身、下にも置かねば、低ひ鼻も高くなる心持、花界を徘徊  
すれば、旦那の殿様のと、どうして〜校書雛妓が、欠伸もさせねば、短ひ髻も延た  
量見、今日の宴會、明日の會食、さて明後日は何としよう、とトンダ事を苦勞とする  
どの、さても氣樂な生活かな、左りとは愉快な家業じやと、見る物聞物、誤まぬはな  
けれど、借本人の身になると、他見八目實地に當らず、他人の思ふやうには參らぬ物、  
民間の奴輩が七面倒にも、八釜しく苦情を云ふ——乃公等が月給は、高ひようでもさ  
うでなひ、官人の官人相應の費用が入る、あすこの勘定この仕拂、借金の利息某會  
の掛金、此月末の大困難驚入った始末どの、知て居ながらスマシた顔、無ひ金もある  
よらかな身振をし、苦し胸を樂しそらに見せて、フーン、新橋の……で御座るか、  
中々可憐な顔をしちよるて、ナール、日本橋の……在用々々、わひとんも名染で御坐

る、なんかんとそれ相應も同夥の公際もしなけりやならず、それはまだしも長官の御機嫌伺、お髯の塵を拂ふには、これも矢張金のいる事、氣樂そらゐ顔をして飲や唄へも自分の爲め、位置を固めう月給を増そら、免非職にはなるまひ爲め、圍碁をするなら下手な奴でも長官なれば負けねばならず、負けば長官が高する、鼻を仰で、實にお上手感心な者本因坊でも及ばぬお手許、拙者などは黒でげす、ナ一ニ三四目置かねばなりません、心の裏では何のあの下手野郎がと思ふて居ても云はねばならず、偶 幫間を招て差引勘定はすれど、こいッもロハでの濟まぬやッ、宅へ歸れば細君が、ツーンとすまして長煙管、煙草輪に吹き、シロリと横目、承れば意氣な話、芳町とやらの藝者はんを、ズーツと根引きの前借仕拂、鐘を見るように君に撞れて權と鳴る、とは又イライお楽しみ、足掛三年の負債は拂ひひでも、愛妾一人の相談はまどまりを附け、胴妾幸妾が出来たとと、左りどの思召の程が……で御坐んしやうと、竹刀打だかしんなりうちだか、お面をシツカリ一本まひると、主人公は苦笑、これは

は又トング邪推、洋服屋の勘定もチヨツキりすまぬに上着(浮氣)の出来る筈はない、それのこー云ふ譯さよく聞くべし、この一兩年の経費節儉とか歳費省略とか云ふ吝嗇な説官海に行はれて、我々の同侶も兎と云ふ字に似た者を頂戴して、後退のなりかねるあり、田樂のような文字のある辭令を蒙て味噌をつける向もあり、所で五六日以来長官の顔色何でも妙、一昨日説論をくつたのもどうやら地震の前兆らしく、地震雷 火事親主、恐しひ所で一の思案、よくよく様子を探て見ると、長官殿の芳町の○妓に電信柱の上へ立て頸ツきりのねらわッ、所が○妓も痒者なり中々ウソとは云はぬやッ、所を云へすが僕の腕、これさひなれば大願成就、君への忠勤此上なしと昨晚からの大骨折、漸の事でまじめをつけ長官殿の嬉そらな顔を見て、ヤ安心と歸て見れば何の事だ、トングお門違の嫉妬沙汰そんな氣樂なわけでないひ、やれく役人も骨の折た者こーと知たら些少やそツと貯蓄の法方なりとたて、居けばよかつたッけ嗚呼、

第九 歸朝者の歎息

第九 歸朝者の歎息

汽笛一聲ビュ——と鳴り、車輪一轉ガタ／＼と響けば、アナ無残、さても悲、残る煙を瀧の種、日本も煙と消へやらんとする、時はしも界ひけり、我、苟業成學遂て、異域に幾歳古郷の、地を踏とらば威張たもの洋行風を吹て呉ん、歐洲熱を起して見せん、テモ愉快ア—ヲ樂とばかり、悲、中よも心躍て手は舞たり、左れと左は云へ、どうあろう、知らぬ異國——玉麥の化者見るような赤髯の國——言葉も違ふ風俗も均はなひおれわの國、病氣をだしたら何とせん、金をなくしたなら困たもの、なんかんと、今乗出す大洋と一般限のない妄想果しのなひ思案、それも悉皆餘計な心配で五坐ツたと談合ようになつたの、上陸後、一年も過た時のこと、言葉に不都合のなくなつた頃は、日本をたつ時の考を忘れた頃で、唐も天竺も歐羅巴も何處もかしても金で見たる世界、何處も同じ秋の暮より年の暮、金ある者の何の苦勞か候べき、お足がなくては歩ぬ世のなか、ま、よま一ツ差手紙、切手がとりもつ綴かひな、そら爲替が來た

二百圓か、ビール飲むべし玉突べしとロンドン詩散す倫敦の晨、威張まゐる巴里の夕、骨牌の稽古料理の食方は、あわれいみじく卒業したれど、學文はヌタレタデーとなり勉強の辨慶然と到著の砌たつた一度、ソツファイグ宜しう五坐る、ナーニ、ダーリーが一番、イーヤ、シヨセヒインに限るなんと、たいさへ下つた目尻をダラリ……ねまけに覺た勝負ごと、ボカ(骨牌遊の一法)をボカ、遺出ては終る喧嘩のボカ、となり、プール(玉突の一法)をプール、慄ながら突始てはコンピチーシヨノコーナー(角の穴へ入れます)に今度姉さん困難と談る……こんな工合も暮されては金と一般、親主もたまらず、歸朝がよかると手紙の嚴命、よひ幸と久し振で歸て見れば日本の現況、今は昔と異た有様、官途につかつか月給が少ツて、ねまけに試験が面倒なり、五年跡には小僧に取扱つた年少の友人すら、今は早奏任の中位に居者を、その友人よりも下廻では瀨にささる、ま、よ會社になど遁入か、まてよ僕は算術が出来ぬわ、簿記も知らぬわ、新聞記者とでも化ようう、これもため／＼、一休筆と云

第九 歸朝者の歎息

ツては、借金の申譯か、學資(と名をつけて)の無心よりほか持たことがない、いつそ教師がよからうか、イヤ、これも日本で勉強した人物に適當なやつが多くて我々にはチト向が悪、著述でもやらかそうり、中々賣まひて、エ、考れば苦勞なる、面白くない、チツト酒でも傾けてくよくよせぬが一番まし……酒のめバ何か心も春めきて借金どりの驚の、聲を聞よな歌妓の、さてかすくく目出度な……そら酒だ、ナ  
 一ニ、日本の酒でいなひ、と云て三本持てこひと云ふのもなひ、ビールかうツイン、イヤ、それも下等だ、シャンペンに限て、一本五圓だど、かまふ事はなひ(直段ばかりか拂までも)そーしてシグリーツを買てこひ、フーン、譯らぬかシグリーツて之のは時雨蛤のことではなひぞ、巻煙草といふことだ——紙巻の——

第十 歎息家の歎息

咳痰も出だすと際限のなひ物、歎息も仕始ると果しのなひ譯、落たものを拾んとする時の、矮性せむしに生れざり芝を歎息し、遠眼鏡を見る節の、偏目に生附ぬを歎息し、小言を聞折の、ア、なせ僕のお袋も、僕を興者にはして呉なかつたかとの歎息、三十日の書出を見ては、サテモ胴慾な天どうさま、なせ己を盲目にはして下さらぬとて是も歎息、なろう事なら雨の替に酒をふらし、雪の代理に米をまひてはしひ者、そらも參らぬ天帝の連なさ、テモ困たと云ふての歎息、慶事には吉兆あり、兇事には前變あり、今年の虎列刺は何の兆々、下ると云ふ點から見れば、米價下落の前兆か、イヤくこれらハ皮想の見、何でも兇事のしらせじやとの嘆息、人情薄なツて面皮厚をいたし、道徳心短なツて手は長なり、借金高くなツて根性低、をしの太なツて身代細なる、こんな事ではマーどうなろうと云ての嘆息、米價の高直に貧民の困難、何國も同じ不景氣に、商人の哭顔、なんと生姜や山葵が利てか、涙ぐむを見ての歎息、法學の方角を違へて放學の研究、醫學は不覺となツて畫美人に現をぬかし、商法學は學ひで娼房に通じ、農學をこのけとなツて能樂處か芝居、芝居處か夜道の練習、學成者は幾何ぞ、たましく學成業遂ても、賣口なさをこれ如何、書生を見ても亦歎息、旦那めー

第十 歎息家の歎息

二十四

りやしよら、ハイ、どちらでげすと、乗さきから口車、一寸先も闇どゲンコで日を送る、其車夫も妾君を乗てゴンサイくど走り、兩人の盲目を乗た偏目の車夫が、五目なひくと馳る者抑幾何かある、三輛が一進三分の一に過ず、その他は悉皆客待商賣此遊民を何如せんと車夫を見てもまた嘆息、是れを大にすれば國權、これを小にすれば今日のくらし一から十まで、重々嘆息また息歎、とこんなな歎息を續けて、讀者諸君もよせばよいにと同じく嘆息、著者も倦がきて矢張嘆息、ヲホン、これで嘆息のおしまひ

愛民公論

五日 廿日 發兌

一冊定價金六錢 府下郵稅五厘

愛民公論の不偏不黨の雜誌にして立論正確毫も輕佻の氣なし苟くも平民主義の政治家たる者若くはたらんと欲する者の座右の供する一日も欠く可からざる好雜誌なり紙中朝比奈泉氏の「安樂椅子」を据へ特別寄書に在朝在野諸大家の論説を掲げ更らに漫言、小説等の欄内を設け紙面に一層の彩色を加ふ讀者一讀の上其價値を判せよ 但し前金にあらざれば送附せず

九月十日

東京市愛民社

第十 歎息家の歎息

二十四

りやしよ、へい、どちらでげすと、乗さきから口車、一寸先も開とゲンコで日を送る、其車夫も妾君を乗てゴンサイくど走り、兩人の旨目を乗た偏目の車夫が、五目なひくど馳る者抑幾何かある、三輛が一進三分の一に過ず、その他は悉皆客待商賈此遊民、を何如せんと車夫を見てもまた嘆息、是れを大にすれば國權、これを小にすれば今日のくらし一から十まで、重々嘆息また息歎、とこんなな歎息を續けて、讀者諸君もよせばよいに同じく嘆息、著者も倦がきて矢張嘆息、ヲホン、これで嘆息のおしまひ

愛民公論

五日 廿日 發 兌 一冊定價金六錢 府下郵稅五厘

愛民公論の不偏不黨の雜誌にして立論正確毫も輕佻の氣なし苟くも平民主義の政治家たる者若くはたらんと欲する者の座右の供する一日も欠く可からざる好雜誌なり紙中朝比奈泉氏の「安樂椅子」を据へ特別寄書に在朝在野諸大家の論説を掲げ更らに漫言、小説等の欄内を設け紙面に一層の彩色を加ふ讀者一讀の上其價値を判せよ、但し前金にあらざれば送附せず

東京市愛民社

明治三十三年九月十五日印刷

井村 佐平

東京神田鍋町十九番地

印刷人

小出 範次郎

宮城縣平民 東京京橋區築地二丁目四十四番地中里方寄留

印刷所

東京築地活版製造所

東京築地三丁目十七番地

